



「怒る」から「語る」へ

もり組の子どもたちは、晴れた日の朝一番に、園庭の端から端まで、何周も走っています。毎日の積み重ねで、走り方も格好良くなってきています。

リレーでは、転んでもすぐに立ち上がって走る姿が見られました。「泣かずに走れたね。」と褒めると、「仲間のためだからね。」と、頼もしい一言。これまで何度も転んでは泣き、その度に友達や先生に励まされたことでしょうか。チームの仲間のことを思い、痛さや悔しさを我慢して前を向く気持ちが育っています。

先日の「なかよしクラブ」では、「スーパーだるまさんがころんだ」という運動遊びを行いました。「だるまさんがころんだ。」と言う間に進み、前においてあるボールを取る遊びです。もり組は、こりす組に「一緒にやろう。」と声をかけて、マンツーマンで面倒を見てくれました。この遊びは、全てのボールを取ると子どもたちの勝ちとなるので、最後のボールを取った後は、全員が大喜びです。互いの健闘を称え合う様子からは、結束力や仲間意識の芽生えが感じ取れて微笑ましいものでした。途中、うまくボールが取れなくて涙するこりす組に、もり組が優しく励ます場面もありました。うまくいかないことがあっても、その時に優しく声をかけてもらったことで気持ちを整えるという積み重ねは、とても大切だと改めて思います。

さて、2学期を迎えるにあたり、終業式で子どもたちに、「1年の半分が過ぎて、これからの半分は、次の学年に近付いていく気持ちをもつことが大切。」という話をしました。子どもたちは、凛とした表情で話を聞いていました。終業式後、背筋を伸ばして歩く様子からは、「もうこんなに立派にできるよ。」という気持ちが伝わってきました。子ども自身が自覚をもつと、自ら育とうとする力を呼び起こすことができると考えます。これからは、子どもたちの「大きくなりたい。」という心に働きかける言葉で接していくことが大切です。「自分でやろうとしているね。」「自分で考えられたね。」など、今できていることを見付けて認めると、自立心の芽生えにつながります。しかし、子どもを目の前にすると、どうしてもできていないことばかりが先に目についてしまうものです。そんな時には、大きく深呼吸したり、その場から離れて一呼吸置いたりしてみるのも一つです。「できていない。」と感じて怒りたくなることも、「きっとこれからできるでしょう。」と思って「信じているからね。」と伝え、「以前のあなたとは違うはずだ。」ということが自覚できるように語っていくことが大切です。つまり、「怒る」「言って聞かせる」ことから、「語る」「自分で考えさせる」伝え方へ。この2学期が始まる機会を「節目」として、子どもの自立心の育ちを信じ、支えてまいりましょう。



お手伝いの思い出

我が家では、学期の変わり目他に、誕生日や正月などの節目には、お手伝いのランクを上げるような試みをしていました。これは、正直に言うと、「お手伝いをしてもらうことが増えれば、きっと私の家事が分担されて、楽ができるかもしれない。」という下心があったからです。「今度の誕生日が来たら、こんなこともできるかもね。」と、予告して楽しみにしてもらおうのが、第一の作戦です。肉を食べるときに使用するナイフで、ちくわやキュウリを切ってもらおうお手伝いから始め、何かの節目に、果物ナイフ、包丁へと、道具をレベルアップさせたり、新しい切り方を教えたりしました。卵を割ること、野菜をちぎること、かき交ぜること、盛り付けなど、長男のすることを見ながら、次男も早く同じようにやりたいと思うようにしたことも作戦の一つでした。餃子作りでは、面白い形に包むのを楽しんでいたこともあり、「お母さんの夢はね、ただいまと帰った時に、『食事ができているよ。』と、言われることです。」と、伝えてきたところ、その夢は、息子が高校生の時に叶いました。ぜひ皆様も、この節目に何か新たなお手伝いを提案してはいかがでしょうか。

